

3 鯨の漁場と資源

大津留 健（日本水産株式会社）

南極洋、北洋ともに海況が良くても鯨が居ないようになった。年々北洋漁場は南へ下つて分布し、南極洋漁場は年々漁場北へ上つており、且つ西の方へ移っている。日本近海でも海況条件により沖へ出るか、地かたに寄る（1965、66年マツコウ地かたに寄つた）。資源的には岸の方から沖へ出るほど好いが、海況条件で、黒潮の北側で180°Eあたりまでクジラが多く見られ、またアラスカ湾方面においても南下操業している。これらの現象をみると資源がある程度減つたときは回遊経路も変動するようである。

52°N、148°W付近で好漁場を発見した時にはその付近では北西方からアラスカ海流逆流の冷たい水、その東側には暖かい水が分布していた。南極洋でもバンク（浅瀬）とか海底地形や大きな海況パターンが漁場条件を示しており、また探鯨船はこの前獲れたから又集つているかと調べたり、昔の漁場を念のためみたりする。50日ぐらいの方々を探鯨してみても2割（10日）ぐらい有効な操業するが、操業中更に探鯨範囲を拡げたいが見るひまがない。もう少しうまくやれば、更に好状の漁場をやれ、捕獲も上る。しかし、一船団のつかみ得る漁場範囲は狭いため、操業は本当に困難を極めている。北洋でカムチャツカ・コマンドルスキー沖でハレム？を成したマツコウクジラが無数（600頭位？）に居つた例があるが1カ月後に行くと1頭もいなくなつた。この様に南北移動が著しく速い。何時見たか？それに基づいて全体を推定することが問題である。

4 鯨類の資源診断に考慮すべき環境（海況・餌料等）の問題について

根本 敬久（東京大学海洋研究所）

鯨類の資源の状態を診断する方法として、捕獲した鯨の生物学的なパラメーターを用い且つ捕獲統計を基にして資料を解析する方法が一般に行なわれている。しかしながら漁獲の状態をそのまま表現すると考えられ捕獲統計においては鯨類の資源量の多寡による捕獲への影響のみならず、漁獲に用いた漁獲努力の量および質も極めて大きい影響をおよぼすと考えられる。

捕獲において最も信頼し得る漁獲努力量は Laws の指摘した様に現在の所捕鯨船1隻1日当りの捕獲努力であり、これらについては既に南極洋の鯨資源を診断する4人委員会や北太平洋の鯨資源診断グループにおいても捕鯨船1隻1日の操業努力を1CDW（1 Catcher's Day's Work）として採用している。資源状態を正しく診断する為にはこれ等捕鯨船の質的に向上する捕獲努力、母船の処理能力を考えると、現在迄に行なわれている鯨類の資源診断における漁獲性